和の心でおもてなし

～浅草の観光人力車の草分け

浅草の町を走る人力車。外国人観光客にも好評だ

東京を代表する観光地・浅草。雷門、仲見世、浅草寺…と、江戸情緒を漂わせる下町に、ふと視線を上げると、近代建築の粋を集めたスカイツリーが天を突く。江戸からTOKYOまでが同居する不思議な町浅草は、絶好の観光スポットとして外国人観光客の人気を集める。にぎわい見せる町並みで、観光客を楽しませているのが人力車だ。今やすっかり浅草の風景に溶け込んでいる人力車による観光案内が、実はここ18年の歴史なのをご存じだろうか。この新たな観光ビジネスを始めたのは、神戸市出身の藤原英則さん（58）。人力車の「時代屋」を創設し、日本の文化を広めるため、オーナーとして人力車の認知度アップに汗を流してきた。現在では約10の業者が競い、約160台もの人力車が下町を行き交う。だが、ここまでくるのには、長い道のりがあった。

（神戸新聞社東京支社編集部長　小野　秀明）

目指すは町のコンシェルジュ

「こんにちは。人力車ご案内できますよ」

浅草のシンボル雷門のすぐそばで、元気のいい声が響く。鯉口とよばれる木綿のシャツに腹かけ、地下足袋姿の車夫たち。まるで明治時代にタイムスリップしたかのようだ。

時代屋で社員として働く碓井雅大さん(33)は、日焼けした肌に笑顔が印象的だ。もともとは会社員だったが、営業中に見た人力車にひかれて転職し、6年目を迎える。「お客さまと直接話し、反応が返ってくる。『楽しかった』と言われるのがうれしい。まるでライブの舞台にいるよう」と、その魅力を話す。

「人力車はいかがですか？」。観光客に声を掛ける車夫

時代屋では、車夫は単なるガイドではなく、お客に浅草の魅力を知ってもらうコンシェルジュを目指している。このため50以上ある観光スポットの説明はもちろん、身なりや礼儀、言葉遣いなどに独自の厳しい基準を設けている。外国人の観光客が多いため、英語も話せるよう指導している。

人力車を引く技術だけでなく、こうした基準を突破した人には、「名取車夫」と称して「俥(くるま)●●」という名前が付けられている。碓井さんも「俥悠吉」という名で車を引き、平日で10㎞、最も忙しいときには30㎞も走っている。

出会いは学生時代

そもそも人力車は、日本人が発明したものだ。

年号が明治へと変わった翌年の1869(明治2)年に和泉要助らが考案し、翌年東京府下で営業を始めたとされる。江戸時代の交通手段だった駕籠(かご)より早いため、たちまち人気を博した。江戸が明治に移り変わったように、人々の交通手段も駕籠から人力車に代わっていった。

明治、大正と大流行した人力車。一時は全国に20万台あったともいわれるが、公共の交通機関の発達で、数が減っていった。

その人力車と藤原さんとの出会いは、大学時代にさかのぼる。

人力車の乗降場所に設置された道路標識。一般車両は駐車禁止だ

兵庫県立兵庫高校を卒業し、その後、京都の同志社大学へ進学した藤原さん。大学2年生のとき、リヤカーを改造した人力車を兵庫高校の先輩から借りて、同志社大の学園祭に出てみた。200円で客を乗せ、大学近くの京都御所の一角を回ったが、これが大受け。同志社大学の「人力俥友之会」の始まりだった。

一緒にやろうと声を掛けたのが、兵庫高校の同期や先輩・後輩たち。「おもしろ、おかしいことをやろう」「目立ちたかった」という学生のノリだったが、どんどんと人気が出て、大学内でも有名なサークルとなった。今も京都で続く人力俥友之会の初期メンバーは、兵庫県人だったのだ。

当時は、まだ学生運動があった1975年ごろ。日本全体にアメリカへのあこがれが強い時代だったが、藤原さんはあえて古き良き日本の文化をアピールしたい、という気持ちが強かった。人力車という和を表し、かつエンターテインメント性の高いものと出会い、その魅力に引き込まれていく。

時代屋の事務所である「明治館」。当時を思わせるデザイン

横浜・みなと祭でパレード

大学を卒業した藤原さんは就職し、会社員となる。仕事に打ち込み、人力車とは距離を置いた生活だったが、転機を迎えたのが31歳のときだった。

当時、住んでいた横浜市のみなと祭のパレードに、「人力車はレトロでおもしろい」と、会社の同僚と一緒に参加することになった。人力車を借り、大学生をスカウト。総勢約30人で人力車を引きながら、踊りをまじえてパレードした。

そのときの達成感が忘れられず、再び人力車とかかわるようになる。ボーナスや貯金をはたいて3台を購入。休日になると人力車の無料試乗会を開くようになった。これが時代屋に結びついていく。

その活動が評判を呼び、イベント会社などからも声がかかるように。横浜市政100周年、横浜港開港130周年を記念して1989年に開かれた横浜博覧会に、人力車を常設で出すことになり、大勢の人にその良さをアピールできた。

浅草へ

もっと人力車を知ってもらいたい――。日本の古き良きたたずまいを残し、観光地としても有名な浅草なら、人力車にぴったりではないか。そう考えた藤原さんは住まいも浅草に移し、1995年、人力車による婚礼送迎をスタート。翌年、時代屋は観光人力車の営業を浅草で開始し、99年に会社となった。学生時代に人力車と出会ってから、約20年が過ぎていた。

文化体験ができる「江戸蔵」。客待ちをする車夫の人形が出迎えてくれる

地道な努力が観光客にも認められ、人力車の台数を徐々に増やしていった。ほかの業者も参入して競争は激しくなっていったが、その分サービスに力を入れ、町との調和に気をつけた営業スタイルを磨いていく。

雷門から歩いてすぐの場所に今年4月、店舗を移転。「明治館」の名称で、時代屋の事務所兼人力車の乗降場所にしている。「人力車は単なる乗り物ではない。浅草というテーマパークにあるアトラクションの一つでもある」。京都や金沢など全国の観光地にも人力車はあるが、浅草ほど人力車が普及したところはないという。

現在では、女性を含め約30人の車夫が時代屋に所属。さっそうと浅草の町を走っている。

日本文化の体験講座

時代屋では、メーンとなる人力車以外にも、重要視している分野がある。「日本文化体験」だ。

事務所のすぐ近くに「江戸蔵」と名付けた施設を設け、日本人や外国人の観光客が茶道や書道、着物の着付けなど、日本の文化を体験できるようにしている。

この日はカナダの女性が日本人の男性と茶道体験に挑戦していた。着物姿の女性は、お茶の先生の説明

を聞きながら所作をまね、丁寧にお茶を点てた。

和菓子を食べ、抹茶を味わった女性は「（茶せんを回して）お茶を点てるのが楽しかった。礼儀正しくして相手を思うのも、日本のよいところ」と和のおもてなしに満足した様子だった。

ほかにも、提灯やあんどんに絵柄を書き入れる体験や投扇興（とうせんきょう）も楽しむことができる。投扇興は、江戸時代から伝わり、扇を的に向かって投げる。単に的に当てるのではなく、的の落ち方や扇の開き方などによって点数を付ける。なんとも日本らしい優雅な遊びだ。

保存や時代考証も

平日は会社員として懸命に働き、休日には時代屋のオーナーとして人力車が秘めたポテンシャルを伝えようとしてきた藤原さん。時には給料やボーナスを注ぎ込むなど、二足のわらじは大変だったというが、「おかげで視野が広くなった。時代屋は小さいので、問題には的確に対処し、解決しなければ、70点の対応ではつぶれてしまう。その姿勢は会社員としての姿勢にもプラスになった」と振り返る。

藤原さんは、かつて実際に使われていた人力車の保存にも積極的だ。明治、大正、昭和初期に使われた骨董の人力車を計4台購入。歴史を説明する際に見てもらったり、撮影などに貸し出したりしている。時代考証の研究も進め、映画やテレビドラマに監修役としてアドバイスすることもある。昨年のテレビドラマ「お助け屋★陣八」では、車夫役で主演の宮川大輔さんに人力車の引き方や所作などを指導した。

人力車の魅力を問うと、こんな答えが即座に返ってきた。

「人が汗をかいて、全身全霊でおもてなしをする。これほど心に残るものはない。人力車から見る光景、町の空気、車夫の笑顔…。いい思い出をお客さまに残す。そして、日本の良さ、和の極地をこれからも届けたい」

藤原さんと人力車の二人三脚は、これからも続く。

茶道を体験するカナダ人女性

投扇興の体験（時代屋提供）

提灯に名前などを書き入れる観光客（時代屋提供）

明治時代の骨董人力車（時代屋提供）

MEMO

時代屋

東京都台東区雷門2-3-5
☎ 03-3843-0890
人力車は１人10分3,000円から
文化体験は１人2,500円から